書評

水谷哲也・朝岡幸彦編著『学校一斉休校は正しかったのか?―検証・新型コロナと教育』

安田昌則

2020年３月、突然、全国の学校が一斉休校となり、教育界に激震が走った。学校では、卒業や入学の時期と重なり、当時の児童生徒や学校関係者等の困惑した様子が目に浮かぶ。

新型コロナウィルスが社会全体に広がってきた時、一斉休校の判断は適切だったのか。学校はどう対応したのか。教育関係機関はどうしたのか。本書はこのような疑問について新型コロナウィルスと教育を関連させながら多面的に丁寧に解説しており、とても充実している。特に、序章の新型コロナウィルスに関しては専門的ではあるが説明が明快で、繰り返し読みたい内容となっている。

本書は、序章に始まり、第１章から第７章、そして、終章から構成されており、各分野の専門家により執筆されている。

序章「新型コロナウィルスの特徴と学校における防疫と対応」（水谷哲也・古谷哲也・佐藤葉子）では、新型コロナウィルスの発生から拡大、特徴やワクチンとの関係を明らかにし、「未来疫学」という考えが紹介されている。

第１章と第２章は、学校や教育委員会の学校一斉休校やコロナ禍における対応について述べられている。

第１章「学校一斉休校は正しかったのか」（朝岡幸彦・岩松真紀）では、一斉休校に関わる多くの論文を紹介し、背景となる政府の動きを示しながら、一斉休校の妥当性を考察している。

第２章「学校・教育委員会―コロナ禍の教育政策分析を通して―」（秦範子）では、学校や教育委員会による学校休校から学校再開までの学習活動や教育活動への対応、そして、学校現場の今後の学びの在り方が示されている。

第３章から第７章までは、コロナ禍や一斉休校に影響された学校以外の公共の教育関連施設の創意工夫した対応等について述べられている。

第３章「公民館―公民館は新型コロナにどう向き合ったか―」（岩松真紀・伊東静一・菊池稔）では、緊急事態宣言下の対応として東京都多摩地域の公民館の取組や福生市のウィズコロナの取組が紹介されている。

第４章「図書館―ポスト・コロナの図書館に向けて―（石山雄貴）では、コロナ禍における全国の主な図書館の対応を表に整理し、複数の図書館の実践事例から今後の図書館の在り方を探っている。

第５章「博物館―コロナ禍における博物館のあり方―」（田開寛太郎・河村幸子）では、コロナ禍における博物館の対応や博物館の価値、博物館の存在意義が示されている。

第６章「動物園・水族館―新型コロナによって見直される役割―」（田開寛太郎・河村幸子・小山こまち）では、動物園・水族館の維持管理の難しさに加えコロナ禍での水族館運営の工夫、そして、動物と人との共生の必要性が示されている。

第７章「屋外教育施設・自然学校―環境教育における自然体験活動への影響―」（稲木瑞来・加藤超大・秦範子・増田直広）では、コロナ禍における屋外の環境教育活動に関わる日本環境教育学会や自然学校関係団体の積極的な対応や、自然体験活動の重要性が示されている。

終章「ふたたび『学び』をとめないために」（朝岡幸彦・三浦巧也・阿部治）では、文部科学省が示す「学校の新しい生活様式」を踏まえメンタルヘルスを育む必要性、さらにはSDGsとの関連も示されている。

このように、本書は、新型コロナウィルスの特徴を明らかにして一斉休校の判断について検証し、学校や教育委員会、公民館や図書館等、コロナ禍に直面した教育関係機関の様々な課題を乗り切る姿が描かれている。また、環境教育やSDGsの視点を意識している事も現代的課題に合致して大変参考になる。さらに、巻末資料の新型コロナウィルス感染症に関わる文部科学省等の通知文や動きは、一覧表となっており教育関係者にとって大変ありがたい資料である。

本書には、「学びの保障」の考えが根底にあり、一斉休校や各教育機関の取組を学びの面から捉え直すことができるとともに、ポスト・コロナにおける学びに向け、今後の学校教育や社会教育の方向性が示されている。

まだ終息が見えない新型コロナウィルス感染症であるが、今後、新たな感染症が発生したときに、どんな視点や根拠で判断し、どのような対応をしたらよいか考える上で、手元に置いておきたい一冊である。（筑波書房、2021年５月、143頁、1,980円税込）

安田昌則（やすだ・まさのり）大牟田市教育委員会　前教育長。